誓いを立てて

ゆうこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
誓いを立てて

【Ｎコード】
Ｎ８１１６Ｖ

【作者名】
ゆうこ

【あらすじ】
さくまゆうこ先生作「聖海のサンドリオン」の二次小説です。
エスピオン派のわたしとしては是非ソラーナと幸せになってもらいたいと、書いてみました。

さわさわと海からの穏やかな風がソラーナの黄金色の髪を優しく揺らす午後のひと時――――

島民の居住場所の修繕もあらかた終わり、春に持ち越しを余儀なくされていた王宮の再建も着々と進み、今もスドエステシーの海神、サー・ウェステンの店に居候しているサンことソラーナ王女は初夏の陽気に誘われ、スドエステシーの望む丘に来ていた。

短かった髪も肩下まで伸び、今は少年の格好ではなく、町娘が着る踝丈の木綿のワンピースを、首には『オールドアースのコイン』が柔らかな日差しに光輝いていた。

こんな格好をかつての女官たちに見られたら卒倒されかねない。しかし王宮が完成すれば、島の統治者である女王となり、王宮の奥でかつて身にまとっていた豪奢なドレスを着込み、踵の高い繊細な作りの靴を履き、伝統と仕来り、内外の政務に勤しまなければならない。だから高貴な子女のする格好ではないとか、見っとも無いとか言われようと、自由でいられる今だけは意志を通している。

彼女の傍らには長身痩躯の護衛剣士が影のように控えていた。黒い長髪をひとつに纏め、黒曜石を思わせる瞳。剣士がまとうサーコートも黒なら、腰に携える神剣の鞘も漆黒。

その漆黒の剣士の名はエスピオン。

ノースシーの海神ノルドを親神に持ち『仄暗き闇の戦士』の銘を持つ者――――

彼がオリエンシーに新しく誕生した茨城の小島からソラーナの元に戻ってきたのはつい先日のことだった。

※※※

ソラーナの毎日は、朝から昼過ぎまで王宮の建設に携わる島民たちのための昼食の準備や喉を潤すための水を入れた皮袋を肩に下げ、忙しく立ち働く人々の間を縫って運んでは労いの言葉をかけることが日課になっていた。

その日もいつものように仕事を終え、サー・ウェステンの店に向かっていた。そろそろ店が見えるところまで来た時、そこには忘れようにも忘れられない人の後姿があった。

ソラーナの心臓は跳ね上がり、全力疾走した後のようにドキドキと胸を打った。喉はカラカラに渇き、その人の名を呼びたくても思うように声がでない。足に力が入らず、今にもへたりこみそうだ。それでも何とか彼に向かって一歩を踏み出した。しかし近づいているはずなのに視界がぼやけてよく見えない。

不意にその人は振り返る。あまり表情を表さない彼の瞳が見開かれた。それが合図になったのか、ソラーナは両腕をあらんかぎり伸ばしその人に向かって駆け出していた。

「エスピオン！！」

震える声でその人の名を呼び、胸に飛び込んでいった。

エスピオンに抱きとめられ、ソラーナは何度も何度も名を呼び、そのつど彼の低く優しい声が『はい』と答えてくれた。

その後どうなったのか、正直なところソラーナには記憶がない。なぜなら気を失ってしまったからだ。

森へつづく道と商店街につながる道にわかれる分岐点だけの雑草のおおい茂るだけのそこに、突如1軒のパン屋が出現し、店から出てきた灰色の長髪の優しいまなざしの紳士はやれやれと呆れながらも、エスピオンの腕の中で気を失ってしまったソラーナを優しく見つめた。

サー・ウェステンに促され、エスピオンは二階にある彼女の部屋のベッドに運び寝かせた。頬を伝う涙を人指し指の背でそっと拭い、愛おしいソラーナの寝顔を見つめホッと息を吐いた。

「生死の分からない君の帰りを待ちわびていたからね、安心して気が緩んだのだろう」

扉の角にもたれ軽く腕を組んでいたサー・ウェステンはなぜもっと早く戻ってこれなかったのかとわずかながら非難を含んだ、それでいて淡々とした声でエスピオンに語りかけた。

「私は……ここへ、ソラーナ様のそばへ帰ってきていいのか悩みました。悩み、考え、心のうちに何度も語りかけました」

「答えが出たから戻ってきたのだろ、では二度と泣かせないでくれ」

それだけを言うとサー・ウェステンは静かに部屋から出て行った。残されたエスピオンは上掛けから出ているソラーナの小さな手を両手で包み込むようにもち上げ、そっと己の額を落とし、二度とそばを離れないと囁くような声で誓いを立てたのだ。

※※※

穏やかに凪いでいる海を見つめながらソラーナはエスピオンのこと

を考えていた。
自分が抱いている彼に対する気持ちはいったいどこにあるのか。
サー・ウェステンは『それは愛だ』と語った。

言われた当初、芽生えたばかりの感情に自覚すらなく、ただ剣を抜いてほしくなかった。離れ離れになっていた月日の中で、そのことを考えない日はなかった。
それでもまだ答えは出ない。

自分はあまりに幼く、彼になにを望んでいるのか。彼がこれまでにしてくれてきたことに対してどう報いるべきなのか。分かっていることはあの時と同じ、剣を抜いてほしくないという思い。

彼は剣士だから戦いが起きれば誰よりも先に剣を抜く。戦うときは誰よりも危険な場所に身をおく。
今までそうであったから、これからもそう在り続ける。剣士だから当然なのだ。でもソラーナはその当然が怖かった。

『貴女にこの身の全てを捧げます』『あなたのために、生きているのです』

エスピオンの言葉が今更ながら重く感じられた。

彼に盾になってほしいわけじゃない。隣にいてほしい。ただそれだけなのだ。だからソラーナは考え続けた。そして出した答えは、エスピオンに剣を抜かずにすむよう自分が彼を守ることだった。

ソラーナは海を見つめたまま呐々と語りだした。

「エスピオンがいない間、ずっと考えて決めたことがあるの…。今

度はわたしがあなたを守るって。でもね、あなたのように剣なんて振れない。だから考えたの。考えて考えて、わたしにできることってなんだろうって……考えつづけた。」

海からエスピオンに視線を移せば、そこに戸惑いを浮かべた彼がソラーナを静かに見つめていた。

「永久的な平和なんて無理。でもね、あなたが剣を抜かなくてもいい何十年間の平和なら、島のみんなと一緒に創れると思うの。だけどそれは生半可なことじゃできない。理解し、納得してもらうのにものすごく時間がかかるだろうし、迷うこともあるだろうし、失敗だっていっぱいすると思うの。きっと落ちこんだり、不安になって途方に暮れて泣いたりすると思うの。だからね……傍にいてほしいの。ずっと傍にいてほしいの。エスピオンが傍にいてくれたらわたしがんばれる」

ソラーナの小さな手がおずおずと伸び、剣だこだらけのエスピオンの大きな手を取ると、掌にそっと唇を押し当てた。
エスピオンは一瞬息が詰まり、目を閉じて静かに息を吐いた。掌に感じるソラーナの柔らかな唇の温もりが、やがて全身を満たし愛しさが胸に溢れた。

片膝をつきエスピオンは囁くようにソラーナの名を呼び二人の視線が重なった。

「私がこの島へ戻って来たのは二度と貴女のそばを離れないと決めたからです。貴女のめざす国づくりを手伝わせて下さい」

ソラーナはその言葉に破顔し、エスピオンの首に飛びついた。

エスピオンは自分を守るためにその身を盾にするのを決して止めないだろう。だからこそ、そうならないためにソラーナはなんとしても平和な国を実現しなければならない。
彼が傍にいてくれるのなら、ただそれだけで勇気が湧いて出てくる。いつの日にかそれが実現できた時のため、降り注ぐ日差しと海風の中、ソラーナはエスピオンを二度と失わないために心に誓った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8116v/

誓いを立てて

2011年10月8日12時20分発行